

# fu+

No.18



地域の特性や課題に応じて取組む

# まちづくり



キーパーソンインタビュー

庵野 秀明

川上 量生

麻生 健

ロバート キャンベル

クリエイターインタビュー

うえやま とち

URCLレポート

- 伊都キャンパス移転と未来社会構築への挑戦
- 「福岡100」老いる福岡市への期待
- 国連ハビタット福岡本部設立20周年
- JST「さくらサイエンス」への参加
- 市民研究員受入事業



## CONTENTS

# 特集 地域の特性や課題に応じて取り組む“まちプロ”

### 2-3 巻頭メッセージ

住みやすくチャレンジできるまち福岡市  
さらなる飛躍を目指して  
福岡市長 高島 宗一郎

### 4-13 URC Reports

- 伊都キャンパス移転と未来社会構築への挑戦
- 「福岡100」老いる福岡市への期待
- 国連ハビタット福岡本部設立20周年
- JST「さくらサイエンス」への参加
- 市民研究員受入事業

### 14-15 Key Person Interviews

福岡にしかない時間の流れから精  
庵野 秀明  
日本全体に通用するアーティストが  
川上 量生  
福岡に新たなスタジオ、福岡からチ  
麻生 健

### 16-17 Key Person Interview

言葉をつむぎ、福岡の魅力に迫る  
ロバート キャンベル



No.18



鋭なクリエイティブを

いる、福岡がクリエイティブなコアに

チャンスと人材の創出へ

**18-19** CREATOR Interview

紙とペンさえあればどこにいてもできるのが漫画の魅力。  
世界共通言語になりえる漫画で楽しい世界にしたい！  
うえやま とち

**20-28** 特集

地域の特性や課題に応じて取り組む“まちプロ”



# 住みやすくチャレンジできるまち福岡市 さらなる飛躍を目指して

福岡市長 高島 宗一郎

## 新しいチャレンジに 全国から注目が集まる福岡

「人と環境と都市活力の調和がとれたアジアのリーダー都市」の実現に向けて、福岡市を次のステージへと飛躍させるチャレンジ「FUKUOKA NEXT」を着実に進めています。

2014年にグローバル創業・雇用創出特区の指定を受けて以来、市内で創業する外国人の在留資格申請時の要件を緩和する「スタートアップビザ」や、一定の条件を満たせば法人税が最大5年間免除される「スタートアップ法人減税」などの規制改革案を次々に実現させてきています。

2017年4月には、これまで市内に分散していた3カ所のインキュベート施設とスタートアップカフェを都心部にある旧大名小学校に移設し、福岡市の新たなスタートアップ支援の拠点施設「Fukuoka Growth Next」としてオープンしました。連日セミナーや起業家と投資家の交流など活発なビジネス活動が展開されています。

こうした施策がスタートアップの成長や都市の魅力向上につながり、福岡市は全国から注目されています。



スタートアップカフェ

## まちが生まれ変わる 「天神ビッグバン」が本格化

福岡市では、アジアの拠点都市としての役割や機能を高めるため、新たな空間と雇用を創出するプロジェクト「天神ビッグバン」を推進しています。

これにより、天神地区は、付加価値の高いビルへの建替えなどが進み、人・モノ・コトの交流する新たな空間が生まれます。これに合わせ、連節バスを活用した新たな交通システム「都心循環BRT」の形成などに取り組むことで、過度に自動車に依存しない、ひとを中心とした歩いて出かけたくなるまちに生まれ変わります。

「天神明治通り地区」や「旧大名小跡地」においては、国家戦略特区で認められた航空法高さ制限の緩和によって、民間活力を最大限に活用し、シンボリックなビルの建設や建物低層部のゆとりある空間の確保、魅力ある街並みの形成ができるようになりました。

「天神ビッグバン」の民間ビル建替え第1号として2017年1月に発表された「天神ビジネスセンタープロジェクト」は、天神地区における開発を牽引するプロジェクトとして期待していますし、「旧大名小跡地」も、地域にとって、福岡市の将来に



Fukuoka Growth Next 外観



福岡市科学館6階 ドームシアター(プラネタリウム)



福岡市科学館5階 基本展示室(フューチャー)

とって魅力的な場となるよう事業を進めているところ です。

今後も、新たな空間と雇用の創出に向け、耐震性やデザイン性に優れた、付加価値の高いビルへの建替を誘導するとともに、快適でぬくもりのある通りの形成など、安全安心で、未来に誇れる魅力的で質の高いまちづくりに取り組んでまいります。

## 住む人も訪れる人にとっても 魅力ある都市へ

福岡市は、長らく親しまれた「少年科学文化会館」を全面リニューアルし、2017年10月、中央区六本松地区に、福岡が持っているポテンシャルや地元企業・大学の技術を最大限に活かした展示を行い、新たな交流や人材育成にチャレンジする「福岡市科学館」をオープンしました。名誉館長に宇宙飛行士の若田光一さんをお迎えし、館内の様々な展示にも全面的にご協力していただいています。

来年度には、東区アイランドシティに福岡市総合体育館をオープン、2019年3月には、中央区大濠公園にある福岡市美術館のリニューアルオープンが控えています。

また、人生100年時代の到来を見据えて、2017年7月に「福岡100」プロジェクトを立ち上げました。福岡市が持つ『都市としての若さ』『チャレンジを応援する環境』『活発なコミュニティ活動』という3つの強みを活かしながら、市民の皆さんをはじめ企業、大学と一緒に、誰もが心身ともに健康で、自分らしく生きていける持続可能な社会づくりに挑戦していきます。

さらに、LINE株式会社と締結した「情報発信強化に関する連携協定」に基づき、防災やごみの日、子育て、イベントといった生活密着情報の中から、自分が選んだ情報だけがタイムリーに届く「福岡市LINE公式アカウント」が2017年4月からスタートしました。友だち登録は30万人を超え、利用者アンケートでの満足度は約8割と、多くの方々に満足して利用いただいています。

来年以降、世界フィギュアスケート国別対抗戦、ラグビーワールドカップ、そして世界水泳選手権が控えていますので、国内外からたくさんの方々が福岡市を訪れる機会を捉え、福岡市の魅力を発信していきたいと思ひます。

この元気で住みやすいまちを更に発展させ、将来に引き継いでいくために、「FUKUOKA NEXT」の取組みを、着実に推進していきます。



福岡100 記者会見



2001年世界水泳選手権の様子

# 伊都キャンパス移転と 未来社会構築への挑戦

(公財)福岡アジア都市研究所 理事長 **安浦 寛人**  
(九州大学理事・副学長)



伊都キャンパス(センターゾーンからウェストゾーンを望む)

## 大学は都市の活力源

1911年に、東京、京都、東北に続く日本で4番目の帝国大学として創設された九州大学は、現在、伊都キャンパスへの統合移転を進めています。創設時には、人口や産業や教育環境(例えば旧制高等学校の設置)において熊本、長崎、鹿児島などに劣っていた福岡市が、今のような九州の中核都市として発展した背景には、この帝国大学の誘致に成功したことが大きな要因であったともいわれています。現在、福岡市には、国公立の11大学が立地し、学生の人口に占める割合は5%で、京都市や東京都に次いで全国3位となっています。

第2次大戦後、国立大学となった九州大学には、文、教育、法、経済、理、医、歯、薬、工、農学部が設置され、全国屈指の総合大学として多くの人材を世に送り出してきました。2003年10月には、九州芸術工科大学と統合し、我が国でも数少ない芸術系

の芸術工学部を設置しました。

## 大学の大きな経済効果

大学は、知識を創造し、蓄積し、継承する貴重な知の拠点です。九州大学は、19,000人の学生と8,000人の教職員を擁し、総資産4,500億円で年間予算が1,200億円の九州内でも有数の事業体でもあります。また、100を超える国々から、2,200人もの留学生を受け入れる国際交流の場でもあります。教育研究活動により、種々の国際会議の誘致も多く、福岡市の国際会議開催数全国2位(過去7年)にも大きな貢献をしています。そして、九州大学だけでも、学生や職員で年間4,000人以上の人口の移動を生み出しています。

九州大学は、六本松キャンパス(教養部、現在の全学共通教育)、理工農学系と人文社会科学系の箱崎キャンパス、医歯薬系の馬出キャンパス、旧芸術工科大学の大橋キャンパス、そして春日市と大野城市にまたがる筑紫キャ

ンパス(大学院総合理工学研究科)に分かれており、キャンパス間の移動が大きな課題でした。1991年に、福岡市西区の元岡・桑原地区への移転が決まり、国と福岡市の共同事業として、現在の伊都キャンパスへの移転が始まりました。最終的に、六本松、箱崎そして原町の農場が伊都へ統合移転することになりました。帝国大学設立後、約100年ぶりにメインキャンパスである箱崎キャンパスが移転することになり、福岡市における人口構成や交通体系の再編にも大きな影響を与えることになりました。

## 伊都キャンパスは日本の都市と里山の縮図

単一のキャンパスとしては我が国最大の伊都キャンパスは、福岡市西部の糸島半島の中央部に広がり、南北2.5km、東西3km総面積272haの広大なキャンパスです。そこに東西1.5kmにわたる巨大な建築群を建てています。丘陵地の自然豊かな里山を残すため、100haを生物多様性保全緑地とし、移植するなどして、植物を1種類も減らさない取り組みを行っています。原町農場施設の移転に伴い、水田、畑地、牧草地、果樹園、桑畑の整備も進んでおり、キャンパス全体が日本の農村や里山の縮図ともなっています。キャンパスの整備が周辺に与える影響を極力小さくするため、キャンパス内に降った雨水は8つの調整池に一旦貯水し、周辺の河川や農地に放流しています。大学は上水を福岡市から購入し、排水を処理する設備に



100haの自然保全緑地は里山の縮図

において4割以上を浄化して、実験用水や中水として再利用しています。キャンパス内と周辺の河川や地下水の水質検査、植物や昆虫などの自然環境の詳細な調査を20年以上継続して行ってきており、伊都キャンパスの整備による周辺環境への影響を監視しつつ、工事手法や建設計画の変更も継続的に行っています。まさに、環境に配慮した都市開発のモデルです。

この地域は、歴史的にも早くから大陸との交流が進んだ地域でした。開発にあたり、70基を超える古墳や多数の古代の製鉄遺構などが発掘されました。西暦570年と推定される大刀などの国宝級の出土品もあります。保存するものは保存し、できないものは記録保存をしっかりと行います。来年完成する人文社会科学系の建物の最高部は、石ヶ原古墳と位置と高さが同じになっており、展望室を設けて古墳時代と同じ景色を見てもらえるように工夫しております。このような多くの歴史的資産との共生も伊都キャンパスの魅力です。

### 先端技術の実証実験と未来を拓くキャンパス

広大なキャンパスは、最先端の技術の実験場でもあります。伊都キャンパスには、燃料電池自動車や水素ステーションを始め、水素材料や水素エネルギー関係の研究所、国内最大の大型燃料電池などの施設や設備が揃っており、世界有数の水素エネルギーに関する研究拠点となっています。

九州大学の学生証や職員証は、独自技術であるVRICS（価値と権利の流通システム）で構成されており、建物や部屋の電子錠、各種証明書などの発行、図書館の利用証、生協が発行する電子マネー、車の入構カードなど多くのサービスを一枚のカードで利用できるようになっています。駅とキャンパスを結ぶバスの利用にもこの電子マ



歴史との共生：イーストゾーンの最上階の展望台は、石ヶ原古墳のあった場所

ネーが使える、学生に限っては自動的に約100円を大学が補助する仕組みも構築しています。キャンパスの入構ゲートの内側を、自動運転や路車間通信による運転支援などの実験場にしていきます。将来のキャンパス内の移動手段の高度化を目指して、複数の企業が新しい交通システムの実験を、バスや一般車両も通行するキャンパス内で大学の認可の上で行っています。このように、新しいキャンパスは先端技術の実証の場ともなっています。

九州大学では、5年前から学部学生に入学時に自分のパソコンを購入させています。いわゆるBYOD（Bring Your Own Device）です。OSやOffice、ウィルスチェックソフトのような基本ソフトウェアは、大学から学生に無料配布しています。これによって、人文社会科学系の学生も自ずとPCリテラシーを身につけることとなります。授業は、電子教科書で行われ、予習や復習も含めて、その閲覧記録（いつどのページをどのくらい読ん

だかなど）を大学が集めています。1日で20万件以上のデータが集められ、すでに3500万件以上の学習データが集まっています。このデータを分析し、学生の学び方の指導や教員の教え方の改善に生かす取り組みを進めています。教育ビッグデータによる教育の見える化です。

学生が狩り部を作り、箱わなでのイノシシ駆除を行っています。狩猟免許も取得し、専門家の教員の指導のもと、狩猟から最終的な食肉にするまでの過程を学生自らが行き、自然界からの恵みをヒトがどのように享受しているかを体験しています。狩り部を創設した学生は、糸島のジビエ食材の流通を行う会社を起業しました。このように、新しいキャンパスは、教育の高度化や多様化の壮大な実験場ともなっています。起業部がクラブ活動として立ち上がり、高度な研究開発とともにキャンパス全体が新しい社会に向けた若者の様々な取り組みの拠点としても発展しています。



燃料電池自動車（ミライ（右）とクラリオン）



自動運転の実験（DeNAのロボットシャトル）

# 「福岡100」老いる 福岡市への期待

(公財)福岡アジア都市研究所 特別研究員 小川 全夫

## 福岡市は「若い」都市か？

福岡市は日本の都市の中でも元気がある。クルーズ船で多くの外国人が訪れ、若い人が遊び、起業が盛んで、住みよい都市である。しかし、だからといって福岡市は「若い」と思い込むのは早計である。確かに福岡市の人口は増えているが、若い人口が大幅に増えているわけではない。2015年11月から2017年7月の間に14歳以下の人口はわずかに0.1%、15歳から64歳の人口は0.5%増えたに過ぎない。これに対して65歳以上人口はこの間に5.5%も増えている。2005年以降は14歳以下の人口が65歳以上人口よりも少なくなっており、今では14歳以下100人に対して65歳以上160人を超える状態になっている。

このような状態は今後とも持続するので、福岡市としては「若さ」を維持するためにさまざまな施策を講じる必要がある。若者が起業しやすい環境を整備する施策はその一つである。日本全体で若者人口が減少している状況にあり、とりわけ福岡市の背後地域を形成している九州・中国地方の若者人口は極端に減少しているので、国内の若者だけに目を向けている段ではない。積極的に海外からの留学生を誘い、起業・就業を支援する施策展開も必要である。

さらに若い世代が子どもを産み育てやすい環境を整えることも重要である。しかし高齢者が多くなることは死亡数も多くなることにつながるので、

それを上回る出生数がなければ、人口は自然に減少する。福岡市もそうした事態が刻々と迫っている（2020年以降は自然減になると将来推計されている）。

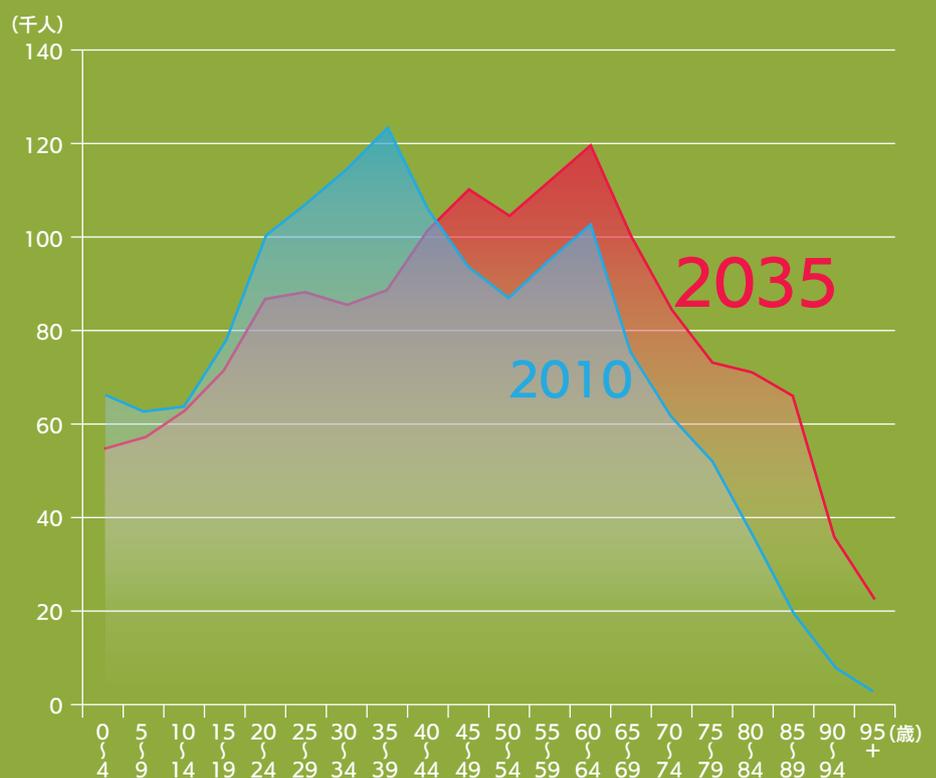
他方、増え続ける高齢者人口に目を向けると、2017年7月1日推計で、福岡市の100歳以上人口は642人、老年化指数163.4（子供100人に対して高齢者163.4人）、従属人口指数53.1（15-64歳100人に対して子供と高齢者の合計が53.1人）という状態にあり、2050年にはそれが80.8に達すると将来推計されている。した

がって「若い」福岡市を維持する努力以上に「老いる」福岡市への備えを図らなければならない。

## 老いる都市への挑戦

2016年3月に高齢期に備える市民にセカンドライフのきっかけを提起する福岡市第3回アラカンフェスタが開催した際、厚生労働省の「保健医療2035」のシンポジウムを同時に開催したことをきっかけに、2016年度福岡市保健福祉局では福岡市健康未来都市戦略策定委員会が設置された。この

図1. 福岡市年齢別人口将来推計(福岡市総務企画局)



出所:福岡市総務企画局

委員会の使命は、「老いる」福岡市を市民が百歳になっても健やかに暮らせる都市にするための戦略を立てることであった。新しい視点で「老いる」社会をデザインしようとする専門家たちが呼び集められ、さまざまな提言を受け、海外在住の委員とはインターネット会議を含む協議を重ねて、2017年3月市議会で、この報告書が提出された。そして改めて7月には市長が共同記者会見を開き、「福岡100」と銘打った戦略を紹介したのである。

「福岡100」で踏まえているのは、労働生産性の向上という視点である。人口学的には、従属人口指数のように若い人口が支えなければならない子供と高齢者の数が増えれば、負担が増えるというのは分かりやすい論理である。しかし経済学的にはこの論理は正しくない。社会的負担は、なにも要援護者を減らさなくても、また一人当たりの社会保障費を節減せずとも、若い労働力に限らず老いた労働力を含めて動員できれば和らげることはできる。さらに働く人の労働生産性を向上させれば、社会的負担を和らげることはできる。これまで医療・介護・保健・福祉の分野では、ヒューマン・サービスは労働集約的な業務であり、生産性の向上にはなじまないと思われてきた。さらに海外からの人材を受け入れることには根深い慎重論がある。こうした現況に果敢に挑もうとするのが「福岡100」である。

### エイジノミクスとウーマノミクスの統合

2016年6月には、福岡市で第1回高齢社会の働く女性の国際シンポジウム(WWAS)が開催され、働く女性、高齢者を包摂する社会経済の可能性を探求したが、その際に女性の活躍を取り込んだ経済学をウーマノミクスという造語を立てて検討する動きと、高齢化(エイジング)を取り込んだ経

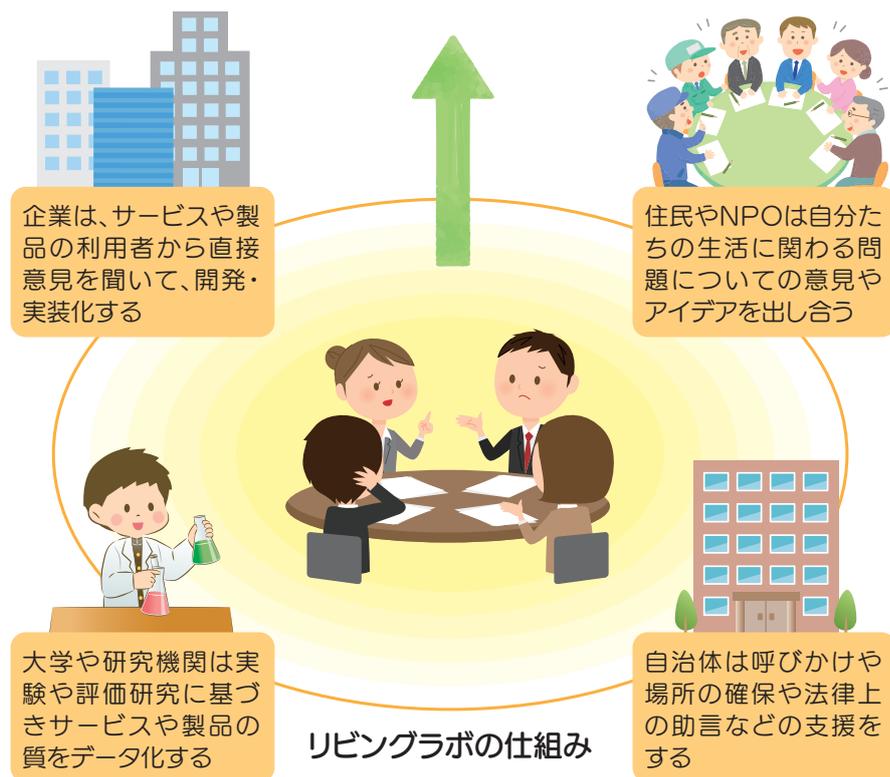
済学を主張する動き(東京大学吉川洋教授ら)の動きを統合する提案があった。また既に2016年3月で10年を迎えた福岡発の国際会議アジア太平洋アクティブ・エイジング会議は2018年1月香港で第11回会議を開催する準備に入っているが、ここでも元気な高齢社会をつくるために、さまざまな技術革新を得た高齢者の就業機会を増やすプログラムについての意見交換が行

われる予定である。そして、「福岡100」に基づいて、福岡地域戦略推進協議会(FDC)は、リビングラボ方式でヘルス・ラボ事業を開始し、さらに介護を支援する技術開発を「ケアテック」として推進しようという動きも出てきた。今後「老いる」福岡市は、発想の転換を提起するフロンティア都市になることが期待されているのである。(2017年10月執筆)



福岡100の開始に合わせ福岡市役所で開催された記者会見の様子

### 新しいサービスや商品の誕生!



# 国連ハビタット福岡本部 設立20周年

(公財)福岡アジア都市研究所 特別研究員 **野田 順康**  
(西南学院大学法学部教授)



国連人間居住計画(ハビタット)福岡本部

国連人間居住計画(ハビタット)福岡本部の設立から20年が経過しました。旧国土庁の誘致担当者として深く交渉に関わり、約9年間、本部長を務めた筆者としては感慨深いものがあります。当初は5年位はもってほしいと思いながら折衝していましたが、事業はどんどん拡大し、予算規模としては日本最大の国連機関に成長しました。本稿ではこれまでの経緯や今後の課題等について述べることにします。

## なぜ福岡に国連があるの？

1995年1月、突如国連ハビタット本部から、分散政策の一環として本部にあるアジア太平洋部をアジア地域に移したいのだが、日本は対応する用意があるかとの書簡が舞い込みました。ここから私の苦しみも始まりました。国内的に誘致の合意をつくるのも大変苦労しましたが、海外にもインド、韓国、タイ、フィリピンという強敵がいたのです。特に、インドはハビタットと深いつながりがあり、有利に話を進めていました。しかしながら、インドはなかなか財政負担問題が解決できず、先方の条件に迅速に対応した日本が徐々に優位に立つことになったのです。

国内的にも誘致したいという都市は62に上りました。朝、オフィスに行くと沢山の自治体の方が待っていて、誘致条件について長々と議論したものです。しかし、これもやはり財政問題がネックになって、当時の

国土庁の判断としては、東京、横浜、神戸、福岡を候補に挙げ、特に神戸が適切と考えていました。阪神淡路大震災復興事業の一環として国際地区を整備する予定でしたし、財源としても震災復興基金を活用出来たからです。

ところが、職員が頻繁に海外出張するアジア太平洋地域本部(28か国を管轄)という性格から、アジアへのゲートウェイ政策を取っていた福岡県・市と地元経済界が果敢な誘致活動を進めたのです。特に、麻生前福岡県知事はアジアとの交流の歴史、アジアへのアクセスの良さ、外国人に住みやすい街を前面に押し出して誘致活動を進められました。結果として、我々担当者も、オフィスから15分で国際空港に着き、バンコクに飛ばばアジア全体が視野に入る好立地を考えると、福岡が適切と考ええるようになったのです。

こうした先人の努力によって、福岡に日本最大規模の国連組織があることを、福岡県民・市民には良く認識して頂き、国際教育など様々な国連ハビタットを活用するとともに、その活動を支援して頂きたいと思うところです。

## 国連ハビタットは何をする機関？

国連ハビタットは何をしているのかわからないと言われる方もおられるでしょう。世界には沢山の国連機関がありますが、ハビタットは都市問題・まちづくりの専門機関とご理解

ください。

現在、世界は急速な都市化(人口の地方・農村部から都市への移動)が進んでいます。1950年には29%であった都市化率(世界人口に対する都市人口の割合)は2008年には50%を超えました。2050年には66%になると予測されています。陸域の2%でしかない都市に約40億人が居住し、経済活動の70%、エネルギー消費の60%以上、温室効果ガス排出の70%を占めているのが現状です。都市化は経済成長を促す一方で、地球温暖化や環境問題にも極めて大きな影響を及ぼしているのです。

特に、このような都市化はいわゆる発展途上国で進んでいることから、発展途上国の都市では、スラム問題、不衛生な環境、未整備な社会基盤(インフラ)、紛争・災害後の復興など様々な都市問題が発生しています。

国連ハビタットは、このような都市問題に対して、コミュニティ・住民の自立的な対応(住民主導型)を促しながら、住環境の改善、上下水道の整備、廃棄物処理などの具体的な都市開発事業を実施している機関なのです。

## この20年の実績は？

1997年8月1日、同本部がアクロス福岡に設置された時には、職員数10人、事業費32億円の小さなオフィスでした。その後、2002年頃から事

業は急速に拡大し、現在では職員数21名、事業費は約300億円になっています。また、アジア太平洋地域に約70の現地事務所があり、ここでは1000人を超えるプロジェクト職員が具体的な事業を展開しています。

この間の最も大きなプロジェクトはアフガニスタン事業です。この20年間の事業費は500億円を超え、住宅建設や道路・上下水道の整備など戦災復興事業を国連の中のリーダーとして実施しています。またミャンマーでは、2008年に発生したサイクロン「ナルギス」の災害復興事業を推進し、居住地の復興、衛生状態の改善、コミュニティの再生に貢献しました。さらにモンゴルでは、首都ウランバートルの急速な都市化に対処するため、基本的な都市戦略を策定し、それに基づいて住環境改善事業を進めました。

過去20年間の総事業費は1000億円を超えており、28か国で434の事業を展開しました。大きな実績と考えて良いでしょう。このような活動はアジア開発銀行、英国、欧州連合、オーストラリア、オランダ、カナダ、スイス、日本、ノルウェー、米国等の多様な援助国（機関）に支えられています。

## 今はどんな活動をしているの？

現在の事業費は約300億円となっており、事業規模順にするとアフガニスタン、ミャンマー、スリランカ、パキスタン、ネパール、フィリピン、カンボジア、ベトナムが上位となります。

このような現地での都市開発事業の他には、福岡で国際環境専門家会議を開いて日本企業の海外進出をサポートしたり、アジア都市ジャーナリスト会議を開催して、都市開発の情報を福岡から直接海外に発信して

います。特に、福岡市等が開発したゴミ処理工法「福岡方式」の普及にも努めているところです。

また地元貢献の一環として、シンポジウム・イベントを開催するとともに、大学・高校での講義、学生の事務所訪問の受入、依頼に応じた出前授業等を行っています。

## 福岡県民・市民や企業とのつながりは？

福岡本部は地元企業で構成される国連ハビタット福岡本部協力委員会から支援を受けていますので、委員会には定期的に活動報告をしています。同本部が永続的に福岡に存続するためには委員会からの支援が必要不可欠です。

県民・市民の皆様に向けては、通常のイベントの他に「ハビタットひろば」を定期的に開催して、その理解を深めて頂いています。ハビタット福岡市民の会や国際ソロプチミスト日本支部との連携協力も重要な活動と位置付けられます。

## 今後の課題は？

この20年の間に、世界情勢は大きく変わりました。国際協力を通じた貧困削減対策によって、多くの国で人々の生活は改善されてきたと言えます。まだまだ様々な貧困問題は存

在しているのですが、アジア太平洋の多くの国は貧困国を脱し、中進国の扉を開けようとしています。

福岡本部も、これまでは最貧国対策に注力してきたわけですが、このような時代の変化に対応し、中進国も対象になる様な都市開発事業にシフトして行く必要があります。中進国といえども、その都市内部には多くのスラム地区や低未利用地を抱えており、その開発が大きな課題となっています。同本部としても、このような中進国の都市問題に積極的に関わって行くことが期待されま

す。また、地球温暖化や地球環境問題には都市活動が大きく影響しています。昨年（2017年）の第3回国連人間居住会議（ハビタットIII）のキト宣言においても、我が地球を救わねばならない、その為にも都市活動、都市生活を根本的に見直す必要があると謳われています。都市の在り方を根本的に見直せば、地球環境の改善に大きく寄与できるのです。このために何をすべきか、福岡本部でも良く検討して頂き、具体的なプロジェクトに結び付けて欲しいものです。

国連ハビタットに長く関わった者として、福岡本部の優秀な後輩たちが、このような新しい課題に果敢にチャレンジして行くことを期待してやみません。

（2017年10月執筆）



都市化で拡大するスラム地区



住民主導の住宅再建（パキスタン）

# JST「さくらサイエンス」への参加

(公財)福岡アジア都市研究所 主任研究員 唐 寅



貞刈副市長表敬訪問

## さくらサイエンスとは

日本・アジア青少年サイエンス交流事業「さくらサイエンスプラン」(SSP)は、科学技術振興機構(JST)が2014年に開始した国家プロジェクトである。発案当初、尖閣諸島問題で日中関係が先鋭化し、双方の国民感情も極端に悪化する事態に陥っていた。日中間の特に若い世代の交流が大切だという視点から、「中国から1万人の若者を日本に招く」というプランをJSTが文科省に提案し、自民党幹部と文科大臣の「指導」を受け、中国だけでなく広く東南アジアも対象にしたことで実現したのである。有馬朗人(元東大総長)や白川英樹(2000年ノーベル化学賞受賞)など日本を代表する科学者の支援により、2017年3月までに、中国をはじめ、韓国、台湾、シンガポール、フィリピン、バングラデシュ、インドなどアジア35カ国・地域の40歳以下の高校生、大学生、院生など約1万3000人を日本に招き、高校・大学・研究機関などで最先端科学を体験し、日本理解のきっかけを提供している。



介護ロボットと対話

SSPの目的は、「科学技術先進国となった我が国が発展するアジアの優秀な青少年を招き、最先端の科学技術に触れて貰い、アジアの科学技術の向上、経済社会の発展に貢献し、アジアとの交流・友好を深める」と、「アジアの青少年の日本の最先端の科学技術への関心を高め、もって日本の大学・研究機関や企業が必要とする海外からの優秀な人材の育成に貢献する」の2つがある。NHKなどのマスコミも、「中国から留学生を誘致」、「エリート人材争奪」といった視点から報道してきた。

## 福岡アジア都市研究所の取り組み

SSPは、「協力関係にある機関や友人を『おもてなし』して、交流友好関係を拡大強化する『草の根活動』によることを原則としている」ため、首都圏に限らず、地方にも拡大し交流活動が活発になることをめざしている。JSTの依頼により、SSP地方説明会の開催に協力したことがきっかけとなって、当研究所も一般公募によって、日本全国にある327の受入機関の一つとして、2015年以降、2つのテーマをもってSSP事業を実施してきた。

一つは、インドネシアの大学生・院生を中心とした「日本とインドネシアによるジェロンテクノロジーのオープン・イノベーション」研修である。オランダから始まった高齢者に寄り添うジェロンテクノロジーの研究開発が日本では盛んに行われ、介護者だけでな

く介護する側も自らをアシストすることができる技術の研究開発が注力されている。一方、日本政府は人口高齢化に対応した社会保障制度の整備と、その変化を支えるための科学技術の革新は、学際的な取り組みを方向づけている。さらに、EPAの締結によるインドネシアの介護人材の導入に大きな期待がある中、その介護人材を養成するための人材育成が求められている。

福岡に立地する大学等の研究教育機関や事業所は、食育理論やスロージョギング理論による高齢者の健康増進、ICTやロボティクス技術による高齢者生活支援、介護サービス提供による高齢者保健福祉増進といった分野での研究開発の評価は高い。そこでインドネシア大学エイジング研究センターの協力を得て、複数の大学及び高校から選抜された学生の研修団を3年計画で招へいし、座学と視察を中心とした8日間の研修プログラムを実施してきた。

座学に関しては、当研究所のスタッフがインドネシア側の問題関心に沿って世界及び日本の高齢者問題について講義を行う。また視察先でもその都度レクチャーを受けている。視察では、主に中村学園大学、九州大学など大学研究室と福岡市関連施設を訪問している。施設訪問では、福岡市健康づくりサポートセンター、福岡市民福祉プラザ及び介護実習普及センター、福岡市民防災センターを中心に訪問し、各施設では担当責任者による説明を受け、多方面にわたって日本の高齢者の健康維持と介護現状について学んでいる。

SSPがきっかけで、参加したインドネシアの大学と地元の大学が交流協定を締結し、研修団に参加した学生の中に後に日本に留学するようになった事例も出ている。

もう一つは、「アジアのリーダ都市をめざす福岡市における大学の研究力と留学生の活躍」をテーマとした中国の高校生研修団の受け入れである。

福岡に立地する大学等の研究教育機関では、世界の最先端に行く研究開発や、生活を支えるモノづくりの研究が盛んである。水素、超電導、地震予防と言った新エネルギー開発や素材分野、さらにバイオやメディカル部門も注目を集める研究成果を生み出している。

また、福岡市では長年にわたりアジアや中国から多くの留学生を受け入れてきた実績があり、彼らは卒業後に各々の科学研究開発分野で活躍し、大きな成果を上げている。

当研究所はJSTの協力相手でもある中国科学技術部とのコーディネーションにより、中国の内陸から優秀な高校生を招き、福岡市をはじめ、北部九州にある大学を訪問し、教育研究の取り組みや留学生受け入れの実情について研修を実施している。

久留米大学の先端癌治療研究センターや大学病院の高度救命救急センターでは、生徒たちが大学の先生の講義を受け、ドクターヘリを見学し、日本の先端医療体制に直に触れることが



「三菜一汁」試食



ワークショップで発表

できる。

九州大学では、水素エネルギー国際研究センターを訪問し、中国人教授から水素エネルギー研究の講義を受け、実験室を見学し、水素自動車にも試乗している。

福岡工業大学では、半導体技術研究所・先端測量研究センターを訪問し、中国人教授からナノ技術研究の実情や3D画像形成及び用途について講義を受け、付属高校では生徒の研究発表を傍聴したり、スマホの翻訳アプリを使って高校生との交流も行っている。

研修ツアーへの参加を通じて、中国の高校生たちが日本の大学の進んだ研究や教育を学ぶと同時に、元留学生たちの活躍ぶりを見学することによって、日本への理解を深め、日本留学へのモチベーションの向上につながったことが報告されている。

## さくらサイエンスのこれから

2014年開始当初、SSPに招聘されて来日した青少年は約2900人であったが、翌年は4300人に増え、2016年3月末に延べ1万3000人に上った。そのうち中国からの参加者は5000人以上に上っている。招へい人数が増えるにつれ、国の予算枠も拡大し、初年度の8億から昨年度の15億円に増加した。主催者は早くも次の目標を3万人と立てている。

一方、中国科技部はSSPを高く評価し、返礼として日本の若い行政官や

大学関係者などを中国に招へいしている。さらに、今年11月末に北京で「さくらサイエンス成果報告会」を開催し、JSTとSSP参加者のネットワークを強化し、末永く交流することをめざして日中共同のフォロー体制を整備しつつある。

わずか1週間程度の短い滞在だが、終了報告には、ほとんどの参加者は日本を好きになり、再訪したいと答えている。特に中国内陸から来た高校生たちにとって、初めて見る日本のすべてが新鮮に映り、彼らが若者らしく大はしゃぎすると同時に大変なカルチャーショックも受けている。SSPへの参加経験は若者たちのこれからの成長に大きな影響を与えるに違いない。これは日本の大きなソフトパワーとなり、アジアにおける日本への尊敬と信頼を築く重要なステップとなるだろう。

当研究所はアジア交流事業の一環としてさくらサイエンスをこれからも積極的に参加し、福岡市がアジアの交流拠点となるための蓄積を拡充させていく。

### 参考資料

- ・JST（国立研究開発法人 科学技術振興機構）  
「日本・アジア青少年サイエンス交流事業さくらサイエンスプラン」  
（2017年3月）
- ・沖村憲樹  
「日本・アジア青少年サイエンス交流事業さくらサイエンスプラン」（「自由民主」、2017年7月4日）



健康づくり体操に参加

# 市民研究員受入事業

(公財)福岡アジア都市研究所 主任研究員 嶋岡 和久



平成29年7月 委嘱状交付式

当研究所の事業のひとつである市民研究員受入事業は、市民の方々に、自主的な立場での研究を通して、まちづくりへの認識を深め、また、交流の輪を広げるにより、まちづくりのリーダーとなっていただくことを目的とし、実施しています。平成12年に市民研究員受入事業を開始して以来、平成29年度までの18年間で108名の市民研究員を受け入れました。市民研究員修了生からは、地域のまちづくりでリーダー的役割を担う人材を輩出しています。

平成29年度の市民研究員は、『「住んで、来て、楽しい福岡の街づくり」～ポテンシャルを生かした新しい福岡の魅力づくり～』を共通のテーマとして研究活動を平成29年7月に開始しました。各研究員の研究予定テーマは以下の通りです。

- 谷脇 良也さん 『福岡の街がワクワクする未来型スタジアムに関する研究』
- 弥栄 睦子さん 『ムスリムの人にも気軽に訪れ、ともに暮らせる街づくりにむけた研究』
- 三毛 陽一郎さん 『「コンパクトな立地」にポイントを置いた「利便性」の高い街づくり』
- 矢野 裕樹さん 『「働き方と働く場」ライフステージを想定した就業支援の研究』
- 山崎 敬太さん 『住んで、来て、楽しい福岡「市街化調整区域」のまちづくり』

## 研究活動の概要

1. 研究活動は、市民研究員の皆さんによる自主研究を重視します。月に2回程度の定例研究会では全員参加の研究活動となりますが、その他に個人による準備作業、資料収集や現地調査等の作業が求められます。
2. 研究期間は、7月から翌年3月までの約9か月間とし、期間中は、研究所の施設の一部を作業スペースとして利用できます。
3. 研究の成果については、3月上旬にアクロス福岡で一般市民向けに発表会を行い、その内容を報告書としてまとめ、福岡市に提言します。

## 市民研究員スケジュール

- ①募集 5月～6月初旬
- ②面接選考 6月中旬～6月下旬
- ③委嘱状交付式及び第1回定例会 7月上旬  
以後翌年3月まで月2回の定例会を実施
- ④研究作業計画書作成 9月
- ⑤作業計画に基づく調査研究 9月～10月
- ⑥調査研究内容の整理 10月～11月
- ⑦中間報告会、OB、OGとの懇親会 11月上旬
- ⑧視察 11月下旬
- ⑨論文の目次と骨子の作成 12月
- ⑩論文内容の精査 12月～1月
- ⑪報告書原稿提出 2月末
- ⑫研究成果発表会 3月上旬
- ⑬福岡市報告会及び修了式 3月下旬



平成29年7月  
第2回定例会  
(左)



平成29年11月  
成果中間報告会  
(右)



平成29年3月  
研究成果報告会



平成29年3月  
福岡市報告会  
福岡市役所

## 市民研究員のこれまでの研究テーマ

平成12年度

「都市と祭り」～このテーマから始まります～

平成13年度

「都市と盛り場」～中洲だけがテーマにあらず～

平成14年度

「都市の記憶」～気になる場所はどこですか～

平成15年度

「都市の風情」～粋なまちには季節がある～

平成16年度

「まちをふりかえる。一シーサイドももち地区の場合」  
～「まちづくり」から「まちづかい」「まちそだて」へ～

平成17年度

『博多のまちづくり』～聖福寺・御供所・博多駅周辺

平成18年度 地域における商店街の活性化を考える

平成19年度 熟年パワーを活かすまちづくり

平成20年度 魅力ある路地・路地裏の復権と再生

平成21年度 人と自然が共生する美しい都市

平成22年度

歴史を活かすまちづくり

(福岡城、旧街道、博多駅移転等の歴史)

平成23年度

互いに助け合い、共生するまちづくり

平成24年度 水辺、海辺を活かすまちづくり

平成25年度

人が集い輝く福岡のまち

(“スタートアップ都市”推進)

平成26年度

スポーツを生かしたまちづくり

(福岡マラソン2014開催)

平成27年度

アジアの先進モデル都市・福岡のまちづくり

平成28年度

さらなるグローバル化時代に向けての福岡市のまちづくり  
～ラグビーワールドカップ、世界水泳、オリンピックを背景に～

平成29年度

「住んで、来て、楽しい福岡の街づくり」

～ポテンシャルを生かした新しい福岡の魅力づくり～

## 平成28年、29年度市民研究員の 矢野さんからのコメント

### 市民研究員に興味を持ったきっかけ

知人のSNSの投稿で平成28年度の福岡市民研究員の募集を知りました。初めは「研究員」という言葉から自分には関係のない制度だと思いましたが、募集要項に「自主的な立場での研究、まちづくりへの認識を深める、交流の輪を広げること」という記載を見て、もしかしたら自分自身が興味のある分野への見識も深めることができるかもしれないと思い、興味を持ちました。

### 去年市民研究員をしてみた感想や魅力

まず感想ですが、純粋に自分が選ばれたことに対する驚きと、遂行に対する強い責任を感じました。次に、市民研究員の活動を通じて感じた魅力ですが、自分自身が興味のある分野をさまざまな経験、背景を持つ指導員、市民研究員の同期との議論により多角的な視点から見識を深めることができます。

### 研究をして難しかったこと

発表までの期間が決まっているため、研究・調査する項目を取捨選択することが必要なのですが、発表内容に客観性と論理性を持たせることと市民目線での主観的な想いのバランスをとることが難しかったです。結局、平成28年度の研究活動では締め切りがギリギリに迫るまで右往左往してしまい研究指導員の岡田先生に迷惑をかけてしまいました。

### 2年連続で市民研究員に応募した理由

前年度に研究・調査したテーマをさらに深く追求するには市民研究員の制度は効果的だと思ったからです。2週間に1度の定例会、さまざまな協力・助言がもらえ、同期と議論ができることは一人で調査するよりもより深い見識を得られると思います。





福岡にしかない時間の流れから  
精鋭なクリエイティブを

日本全体に通用するアーティストがいる、  
福岡がクリエイティブなコアに

福岡に新たなスタジオ、  
福岡からチャンスと人材の創出へ

アニメ・CG制作会社“株式会社プロジェクトスタジオQ”が、日本を代表する映像企画・製作会社の株式会社カラー、ニコニコ動画などインターネットの総合的なエンターテインメントを提供する株式会社ドワンゴ、九州トップクラスの多彩な専門学校を展開する学校法人麻生塾による3社によって、2017年7月福岡市に設立。

(株)カラーの代表取締役社長で、スタジオQの創作管理統括に就任した庵野秀明氏、(株)ドワンゴの代表取締役会長の川上量生氏、学校法人麻生塾の理事長である麻生健氏、三者から見た福岡の魅力と今後の想いとは。

## 底知れないパワーを持つ場所のひとつ、 福岡でプロジェクトスタジオQを設立

**麻生氏:** アニメ、CGに関わる人は美術大学出身者が多いのですが、九州には美術大学が少なく、美術を勉強したい学生は、関東に流失しているのではないかと思います。福岡でクリエイターを増やすには、そこが課題なのではないかと思いました。芸術大学、美術大学出身のクリエイターが活躍できるチャンスがあれば、福岡のクリエイティブな層がより厚くなり、さらに人材を育てる教育機関も充実して行くのではないのでしょうか。そこでまずはチャンスを作るため、ここ九州、福岡でプロジェクトスタジオQを設立し、映像作品



麻生 健氏



川上量生氏

の制作に加えて、制作に関わる人材の育成も行っていきたいと考えています。

**川上氏:** 福岡には街自体が持っている可能性があり、アーティストや芸能人が多い。札幌、沖縄、福岡

で人材を発掘すると出てくると言われています。東京が確立化されている日本全体の中で、地方の独自性をもっているところというのは、東京から離れたところにあります。そこには東京にない、日本全体に通用する才能というコアがある。リバーヒルソフトやシステムソフト、さらに国産3DCGソフトのシェードなど、福岡にはもともとそういった基盤があり、底知れないパワーを持っている場所の一つです。そして福岡で立ち上げたのだから、根づくということが一番にあります。東京の人たちが福岡でアニメを作りたいと思ってくれる、それが実現で

きるようにしたい。

**庵野氏:**福岡には、技術のあるCGアニメーターがいますが、その方々も頻繁に東京に来ることは難しい。それならば福岡にスタジオを作ってしまえばいい。それが実現できる素晴らしい街だと感じています。

## 時間の流れが違う。 それが福岡の魅力

**庵野氏:**東京と東京以外の場所で一番大きいのは、時間の流れだと思います。東京は忙しく、東京から離れると、時間がゆるやかな流れに感じる。そのような環境で作れるものと、また逆に東京でしか作れないものがあると思います。

**麻生氏:**時間の流れで言いますと、福岡はゆとりがあると感じます。コンパクトシティですので、生活圏も近く、時間を有効に使えますよね。家庭も仕事もハッピーになる。その幸福感について考えると、やはり時間の使い方が大切で、効率的に時間を活用できる可能性が高いのではないかと考えています。

**川上氏:**私自身、経営者としてみた場合、社員はクリエイティブな作業に集中してほしくて、刺激が比較的に少ない場所、福岡のような場所が良く、そのような場所の方が斬新で尖ったものが多い。東京だと様々な刺激が多く、尖った人材やクリエイティブなものが生まれにくいですよね。尖った人材は、地方出身で東京に来ている人が多いと思います。そう考えるとベースに都会があるのはいいのかと疑問に感じます。

## 目指すのは、ナンバーワンより ナンバーツー?

**庵野氏:**クリエイターというのは技術職ですので、どうしてもテクニックが必要です。技術を身に着けないとどこにも行けない。CGのいいところは、プログラミングであったり、アニメーションであったり、モデリングであったり、それが分業になっていて、自分は何ができるのかを判断して、選択肢が広がっていくことです。手描きに特化している人は、そのみですが、CGアニメーターは手で描いてCGに置き変えることもできます。それは大きな違いで、それが出来る人はこれからの仕事が増えてくると思います。まずは最小限の技術を身に着けてきてほしい。そういった意味で、専門学校は必要です。独学でもできるかもしれませんが、自分の時間を上手く使えるので授業とかで学んだ方が効率はいい。

そしてナンバーワンよりナンバーツーを目指したほうがいいのではないのでしょうか。2番目の人がたくさんいる方が、作品のクオリティーが上がります。ナンバーワンの人が1人いて、そこに平均的な人がたくさんいるだけだと全体のクオリティーが上がりにくいです。さらに優秀なディレクターがいるとクオリティーは高くなりますね。

何よりも重要なこととして、アニメが好きで技術があればアニメの仕事はできます。それにクリエイターという職だけでなく広報や営業、開発など多種多様な職種もあります。そのような職に就いている人もすごく大切です。どんな職種でもアニメの好きな人たちがいないとアニメはできません。スタジオQのようところで、自分の特性を見ることができれば、その方が効率がいいと思います。そこでもし自分は向いていないと分かれば、他の職種に移ればいいと思いますから、まずはお試しで来てほしいですね。



庵野 秀明 監督

**株式会社プロジェクトスタジオQ主催  
アニメCGコンテスト作品募集中!**

**Award:Q** Project Studio Q  
Anime CG Award 2017

クリエイターのさらなる才能の飛躍、アニメCG業界の新たな可能性に繋がるようなコンテストを目指して、アニメCGコンテスト「Award:Q/Project Studio Q Anime CG Award 2017」を開催。

**応募締切：2018年3月31日(土)**

詳しくは、<https://studio-q.co.jp/award/2017/>

### Profile

**庵野 秀明** (あんの ひであき)

1960年、山口県生まれ。監督・プロデューサー。学生時代から自主制作映画を手掛け、その後TVアニメ『超時空要塞マクロス』(1982年)、劇場用アニメ『風の谷のナウシカ』(1984年)等に原画マンとして参加。1988年、OVA『トップをねらえ!』でアニメ監督デビュー。1995年にTVアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』を手掛け、1997年の『新世紀エヴァンゲリオン劇場版』と共に社会現象を巻き起こす。2006年、株式会社カラーを設立し、代表取締役役に就任。最新作は脚本・総監督を務めた実写映画『シン・ゴジラ』(2016年)。現在は『シン・エヴァンゲリオン劇場版』を制作中。

**川上 量生** (かわかみ のぶお)

京都大学工学部卒業後、株式会社ソフトウェアジャパンでの7年間のサラリーマン生活を経て独立。カドカワ株式会社代表取締役社長(初代)、株式会社ダウンゴ代表取締役会長(初代)、株式会社KADOKAWA取締役、株式会社スタジオジブリ所属、株式会社カラー取締役、株式会社でほぎやらりー取締役、公益財団法人徳間記念アニメーション文化財団理事、学校法人角川ドワンゴ学園理事。

**麻生 健** (あそう たけし)

ブリヂストンスポーツ株式会社 広報室で5年間の勤務を経て、2010年(株)麻生地所、麻生介護サービス(株)取締役就任。2014年学校法人麻生塾理事長に就任。株式会社プロジェクトスタジオQ取締役。日本国内だけでなく、海外においてもグローバル人材の育成に力を注いでおり、2014年総合私立大学「BINUS University」と提携し、インドネシアに2学科を創設。

**PROJECT STUDIO Q, INC.**

## ロバート キャンベル

日本文学研究者

言葉をつまみ、  
福岡の魅力に迫る

## 住んだからこそ見えて来た福岡の魅力

福岡はとても面白い街で、福岡に住んでいる人を対象にした調査によると、福岡が好きと答えた人は96%にのぼり、地元愛の強さを感じます。さらに9割を超える人が福岡は住みやすい、住み続けたいと答えています。一方で、国内における出張に行きたい都市では1位でなく、その数も多くありません。

そこには福岡に住んでいる人と住んでいない人が感じるパラドックスがあり、福岡に住んでみないと分からない独自のコミュニケーションや雰囲気といった福岡の内に秘めた魅力があります。

私は九州大学文学部の研究生として、1985年から11年間福岡に住んでいました。初めて福岡に降り立ったときに感じた印象と福岡に11年間住んだ印象は、随分違ってきます。福岡に来た当時、街の設計やデザインはそれほど際立った特徴がなく、福岡は魅力の薄い街だなどと思いました。実際に福岡に住んで散策すると、都心周辺に神社や仏閣があり、大濠公園や舞鶴公園を歩くと気持ちのよい景色や空間が広がっています。さらに天神から大牟田線で郊外に行くと、太宰府、久留米、小郡など素晴らしい場所がたくさんあります。私の大好きな鴨料理をいただけるお店がある小郡は、天神からわずか約25分で行けます。福岡に住んでいない人にとって、交通が便利になっても、どこにあるのかすぐに分からず、心理的に遠いと感じてしまう。それぞれの魅力的な場所が点在しているので、それらの点が線につながり、面で広がるように、想像しやすいものになると福岡の魅力が分かりやすく、地元の人と外から来た人とが感じるパラドックスを埋められると思います。



27歳の頃

## 福岡を離れて感じた“博多ロス”

ネット通販が急速に拡大している昨今、ほぼ何でも手に入る時代となりました。東京にいても美味しいもつ鍋や水炊きを食べることができます。それでも飛行機や新幹線などを利用して、私が福岡に足を

運ぶ理由は、周りで飛び交う方言、つまり言葉そのものにあります。東京で会う福岡の人は、博多弁や博多性をあまり出しません。大阪の人は、そのまま大阪を東京に持ってきたような感じで、どこにいても大阪を表に出しますが、福岡の人はすぐに東京に溶け込んでしまいます。東京に来た芸能人がそうであるように、すぐに東京に順応してくれます。

福岡は、大陸から文化などが行き交い、発展してきたので、独自のスピリットを持っています。福岡の人たちのコミュニケーションは、適度に粘着力があり、ユーモアがあり、みんなお山の大将だったり、負けん気が強かったり、根拠のない自信を持っていたり、東京と正反対なのです。福岡の人たちは、すごいエネルギーがあって、人に対して臆したり、変に引っ込んだりすることもあまりありません。人との距離感もちょうど良くて、心地いい。

今はTwitterなどのSNSで、欲しい商品に対する口コミも見られ、その場所に行かなくても知ることができ、ネットで注文し味わえます。実際に足を運んでもらうためには何が必要かという別の角度から見た街づくりをするのも面白いと思います。

## 踊り場のような福岡という場所

私は、文学者としての活動だけでなく、テレビやラジオなど幅広く仕事をしており、折に触れてファッションデザインをすることになりました。友達は、アパレル会社を香港で経営しているので、東京に来てもらって仕事の打合せをしていましたが、本当は福岡で合流するのが一番合理的です。アジアと地理的に近いことや歴史的にもつながりが深いことを改めて感じる仕事になりました。しかも福岡の人は外から来た人たちを拒まないし、むしろ外から来た人を貪欲に福岡に取り込もうとします。ビジネスや観光で来た人たちが大勢いることと福岡の人の性質が混ぜ合わさり、火の粉が起りやすい。そういう使い方ができる街です。

私は、福岡への日帰りを頻繁にしています。福岡へ日帰りだと話すと、周りからはもったいないとか、疲れませんかと言われますが、全然そう思いません。誰かと会って仕事して、博多駅の中にある角打ちに寄ってから、福岡空港に行くんですよ。そういうお気に入りの場所を一人一人持っていれば、福岡でお昼ご飯を食べて、3時間くらいビジネスや観光などをやる。そんな有意義な時間を過ごせて、十分に使える。移住や投資、インバウンドも大切ですが、いつそのこと、どちらがサテライトかわからない、1年の中のひとつの大切な踊り場のような場所が福岡であってほしいのもしれません。



国文学研究資料館の外観

## 夜の資源、改めて見る福岡

世界からの訪日外国人が増え、観光振興、地域活性、経済成長を目指し、日本でも観光客向けにショーやライブを夜遅くから公演を始めています。現在「フライデーナイトミュージアム」というのを文化庁が進めていて、一部の博物館、美術館など夜まで開館することがようやく東京で可能になりました。この夜の経済効果を活かしたまちづくりというのが福岡の都市規模だと十分出来ると思います。ニューヨークやロンドンは夜の経済活動が活発で、ロンドンでは、ナイトライフを活性化させるため“Night Czar（夜の皇帝）”という役職を設けました。今後この活動を推進していくために、インフラ整備、夜に働く人の子育て環境などを含め、バランスをしっかりととりながら、そこに住んでいる人と共存して進めていくことが重要です。

夜を資源として考え、どういった資源が福岡の夜にあるのか調査し、今まで気が付かなかったエンターテイメントだけでない新たな一面が発見できるでしょう。首都機能がある東京では調整が難しいことを福岡で可能になると良いですね。福岡で夜の経済効果を視野に入れた取組みを行うと陰影がある福岡になり、さらに魅力が深まるでしょう。



### PROFILE(プロフィール)

#### Robert Campbell ロバート キャンベル

日本文学研究者。国文学研究資料館長。ニューヨーク市生まれ。専門は近世文学から明治期文学。テレビでMCやニュース・コメンテーター等を務める一方、新聞雑誌連載、書評、ラジオ番組企画・出演など、幅広いメディアで活躍中。主な編著に「ロバートキャンベルの小説家神髄－現代作家6人との対話－」(NHK出版)、「Jブンガク－英語で出会い、日本語を味わう名作50－」(東京大学出版会)などがある。

# 紙とペンさえあれば どこにいてもできるのが漫画の魅力。 世界共通言語になりえる 漫画で楽しい世界にしたい!

漫画家 **うえやま とち**

## 卒業後、東京に行かれて 仕事をされていますが、 なぜ福岡に戻られたのですか?

今から40年前は、東京に行かないと始まらないという時代でした。短大を卒業して、いざ東京に上京しましたが、3年半で帰って来ました。最初は公務員をされていて、次のデザイン会社では残業につぐ残業の毎日で、絵を描くこと自体は楽しかったのですが、疲れ果てていましたね。せっかく東京にいるのだから、週末は漫画家先生のところに遊びに行けばよかったのに、当時はシャイな九州人で訪ねて行けずにいたんです。東京での生活は、プライベートも絵を描こうという気になかなかならず、たまの休みの日などに福岡に戻ってくると、生まれ育った町であることや、緑が多く、海が近い、街もちょうどいい大ききで環境がいいということもあり、自ずと描き始めていました。

東京にいた頃、1年がかりで、なんとか32ページのマンガを1本描いて、それを集英社(株)に持って行くと、その作品は、担当者からの評価が割とよく、その後も描き続けていたら、『くだらない勇気』という作品で、手塚賞の佳作を受賞しました。その賞で、ちばてつや先生は、“もっとキャラクターを強めたらいいと思うけど、作品はわるくない”、筒井康隆先生は、“表現力、描写力を評価する”とおっしゃって頂きました。ただ手塚賞を受賞した時には、福岡

に帰って来ていましたので、集英社(株)と話が進まず、話が流れてしまったんです。

福岡に戻ってきて仕事を探し、タウン誌や新聞などに漫画をちょこちょこ描くと、すぐに反響が出てきて、友達からの反響もありました。ちょうどその頃に、ファックスとか出てきて、漫画家さんも地方で仕事をするというスタイルが始まったときでした。東京のデザイン会社で、人よりちょっと上手く絵が描けるという理由で、カットやイラストは描いていましたが、そうではなく九州までお願いしますという人間になりたかったんです。

福岡で仕事をして良かった点と言えば、東京にいと毎週担当者が来られますが、福岡にいとほぼ電話で済み、東京には2~3月に1回の頻度で行けば済むこと、美味しいものが多いということです。今は、電話、ファックス、メールもあり、技術の進歩で日本中どこにいても仕事ができ、便利な時代になりましたよね。

※手塚賞：集英社が主催する少年向けストーリー漫画の新人賞。  
1971年から始まり、年に2回行われている。

## クッキングパパが生まれた経緯を お聞かせください。

サラリーマンだけど、今までの観点にないカッコいいサラリーマンを描きたかった。当時は、ライバルを蹴落とし、勝ち抜いていく、家庭を守りながら男は外で戦ってという漫画が流行っている時代でした。そういう漫画より、戦わないヒーローを描きたかったんです。最初は、このような漫画を認めてくれるか、分かってくれるかどうか不安でした。嫌いなやつ、ツライ話は書きたくないですから。元祖ほのぼの系かな。

博多を舞台にしているのは、体験派であり、また、自分が住んでいるのが博多という理由からです。博多は、具体的な話になっていて、他のグルメ情報誌で紹介されたよりも詳しくあったりもしますよ。

スタジオには、キッチンがあり、毎週最低1回は料理を作っています。基本的には、自分自身で決めますが、分か



料理が得意で、働くイクメンの先駆けとなる主人公を生み出した漫画『クッキングパパ』（株式会社 講談社）。1985年に同誌で連載が始まり、今年33年目となる人気の漫画家うえやまとち氏にインタビュー。

PROFILE(プロフィール)  
うえやま とち

福岡県福岡市生まれ。『モーニング』（講談社）にて『クッキングパパ』が第11回ちばてつや賞、一般部門準入選。1984年から同誌にて受賞作である『クッキングパパ』を長期に渡って連載中。現在は、福岡県福津市にて執筆活動をしている。



一般的な糸島グルメはわかるのですが、西エリアはちょっと疎いのです。西の情報ください(笑)。



らないときには、スタッフの皆に食べてもらい、漫画に出すかどうか決めていきます。美味しくなかったときは、やり直して、最終チェックは、奥さんに判断してもらいます(笑)。そうやってみんなでわいわい料理作っているうちに、ストーリーが浮かんできます。

食やマンガは、楽しくお互いみんなでやれるので、その楽しいということを今後もっと増やしたいですね。中国を舞台にした話も描きましたので、それが国際理解に繋がるなら、もっと描いていきたい。クッキングパパ、現在は142巻。一応150巻を目指して、まだまだ描きますよ!

まんがシーポとは、  
どのような団体ですか?

この世界はすごく厳しいので、みんなで楽しくやりましょうという考えをもとに立ち上げています。すごく努力しても芽が出なかったとか、軽く描いたら、当たったりする人もいます。個人が一人で頑張って、閉じこもっている人が多いので、たまには、酒でも飲んで楽しく語って、落ち込んでいる人がいたら励ます、そういう交流の場を作りたいんです。それに漫画家のコミュニティは、福岡にはなかったということもあります。団体で活動すると、チャリティーみたいなことも出来て、今年1月19日三越にて、九州北部豪雨の支援のために、似顔絵イベントを開催しました。コミュニティにするとそのような大きな活動もできて、広がりが出てきます。

2016年に初めて開催された  
MCPOアワードでは  
5,500点も集まったそうですね。

前は、半数以上が海外からの作品で、思ったより見やすく、想像以上に韓国からの応募が多かったです。漫画は国境を越えた文化交流になりえる存在になっているんじゃないでしょうか。海外からの応募作品が多かったということで、海外は、自国こそが元祖だと思ってくるかもしれませんが、しっかりと日本が頑張っている作品を生み出していかなくてはなりませんね。

これから、漫画家を目指す人に  
メッセージを!

ゲームの場合は、サウンド、映像、プログラミングなど分業でしていきますが、漫画というものは、紙とペンがあれば、一人でスタートできて、自分の思いの丈を詰め込められるから、メッセージを自分で発信することができます。漫画は、楽しい世の中を創るツールなので、楽しい作品を描いてほしい。色んな楽しさがありバイオレンスやサスペンスも、もちろんいい!基本は自分が楽しいと思うものを描いていく方が、長く続きます。自分も描いていて楽しい、読者も読んでいて楽しいというものを描いてほしいです。

福岡中の角うちを  
全部まわろうと計画中(笑)!

※まんがシーポ

漫画の新しい可能性を追求し世界と繋がるコンテンツづくりを目指す団体で、次代を担うクリエイターの発見と新たなコンテンツの誕生を目指した国際賞のMCPO AWARDをはじめ、様々なプログラムを開催している。





# 地域の特性や課題に応じて取組むまちプロ

古くからの歴史を引継ぎながら、成長するまち。駅を中心に、昼も夜も、多くの人が集まり、ビジネスや商業の集積が進むまち。ここ数年、政令都市の中で人口増加率1位になったまち。そんな福岡市では、様々な楽しみをつないで、福岡市の魅力を高めていくために、より多くの人が一丸となって取組むまちづくりが必要です。

福岡市では、都市の供給力を向上させる先進的なまちづくり(fU+17号P14)や超高齢社会へ見据えた持続可能な社会づくり(fU+17号P13)、未来を担う子どもたちが健やかに成長していける社会づくりに向けた取組み(fU+17号P13)など多様なチャレンジを「FUKUOKA NEXT(フクオカネクスト)」と題し、積極的に展開しています。

住みやすい、働きやすい、遊びに行きたくなる福岡市に向けた街づくりは、都市整備や仕組み作りだけではありません。特集では、新たな魅力スポットや地域の特性や課題に応じて取組む団体、住人、その地域で働く人たち“まちプロ(プロジェクト、プロフェッショナル)”を紹介しています。

## まちづくり推進

- ①南区 (P21)
- ②西区まるごと博物館推進会 (P27)
- ③箱崎まちづくり委員会 (P28)
- ④志賀島推進協議会 (P28)

## 施設・交流拠点

- ⑤福岡市科学館 (P22-P23)
- ⑥福岡空港 (P24)
- ⑦さざんびあ博多 (P25)
- ⑧福岡市民防災センター (P25)
- ⑨上長尾テラス (P25)
- ⑩福岡市博物館 (P26)
- ⑪西部3Rステーション (P27)
- ⑫末永文化センター (地図上に記載)



末永文化センターは、末永ホール、小ホール、ギャラリーからなる文化センターです。末永ホールは、九州交響楽団の練習場として使用され、また地域団体のオーケストラ、合唱、オペラなどの練習場として利用されています。さらに1994年に設けられたMUSEE ODA(ミュゼ・オダ)は、福岡県出身の織田眞喜画伯の作品を展示しています。

## 南区

## 大学と連携し、地域とのつながりを大切にする南区の取り組み

南区周辺には7つの大学があります。近年、それぞれの大学では、学生を育てるだけでなく、大学が地域に出かけ、地域に人材や専門的知識などを還元する取り組みが進んでいます。

香蘭女子短期大学教授 河野洋子さんは、学内に地域連携センターを立ち上げ、センター長として大学と地域の懸け橋となり活躍されています。また、大橋を愛する熱い想いから、地域活性化を目指す大橋駅周辺活性化委員会のメンバー渡邊輝彦さん、NPO法人グリーンバード代表の東秀憲さん、南区役所企画振興課 馬場孝徳さんの4名に、大学と地域団体、行政が一体となった南区のまちづくりについてお話をいただきました。

※7大学：九州大学芸術工学部、香蘭女子短期大学、純真学園大学、純真短期大学、精華女子短期大学、第一薬科大学、福岡女学院大学



香蘭女子短期大学  
教授 河野 洋子さん

これまで、本学では各教職員や学生がそれぞれボランティア活動、例えば、学生たちが自主的に集まり短大周辺の清掃ボランティア等を行っていました。地域の方も同じように清掃活動をしていて、お互いの活動を知らずにいました。私が公民館で住民向けの出前講座をする機会があり、その際に地域のボランティア活動を知ることが出来ました。

そこで、地域連携センターを立ち上げ、地域の公民館とのつながりを持ち始める中で、お互いに一緒にできることがあるのではないかということになり、ラブアースクリーンアップや那珂川町に蚩を呼び戻す会という河川清掃などがあり、一緒に活動を始めました。

本学の特徴であるファッション総合学科では、博多織や久留米紆など地場産業と連携したファッションショー等を開催して、伝統や文化など、このエリアならではの特色をどう社会にアピールできるかを考えています。このように地域と連携することで、学生たちは達成感を得られるようになり、今では、学生は地域のために何ができるのかを考え、活動をしています。

地域連携センターを立ち上げて2年、私たちが地域に出ることでお手伝いできること、逆に地域の方にお手伝いしていただけることがたくさんあるんだなということを感じました。南区は、子育て世代や高齢者だけでなく、単身者などをどう取り込んでいくかという課題があります。お互いが歩み寄るには、まず知り合わなくてははいけません。私たち教育機関ができることは、人に対するハードルを下げ、ソフト面から絆を作り、“大橋駅周辺活性化委員会”や“グリーンバード”など、地域のさまざまな団体と連携することです。そこから新しい街とコミュニティが生まれ、それが街づくりの原動力になると思います。



左から、馬場さん、東さん、渡邊さん  
和気あいあいとした雰囲気  
の打ち合せ

株式会社 大橋西口ビル  
代表取締役 渡邊 輝彦さん

父がもともと地域の祭りの世話役や商店街の会長をしており、その影響で私はいろんな団体に所属し、お祭りを開催していました。

今まで大橋の団体といえば、商店街と自治会しかなく、まちおこしのイベントをするのにふさわしい組織がありませんでした。そこで2008年、「大橋駅周辺活性化委員会」が結成されました。活動としては、東さんと一緒に「まちむすび」プロジェクトや、地元自治組織や商店街などと共働で“楽しかおおはし”を開催しています。新たな組織を作るには、やはり人が大切で、地域の中から探すには限界があります。そこで、外部から連れて来たり、近くの大学から学生さんに参加してもらうなどして人集めをしています。そして大切なのは、人を集めるだけでなく、人材育成して、どうやって次へ繋げていくかです。そこが上手くいかないと、地域づくりは衰退していくんですね。商店街の活性化と人材育成を同時に進めて、今後も大橋エリアの活性化に貢献していきたいと思います。

NPO法人グリーンバード福岡／(公財)社会福祉笑顔ふれあい財団  
事務局長 東 秀憲さん

福岡市出身でない私は、外から見た目線で、福岡市出身の渡邊さんとどうハレーションを起こせるのかということ常々考えています。街づくりというのは、人づくりなので、継続すれば、誰かが認めてくれて、その認めてくれる人を集めて、ハレーションをおこし、それが財産や宝になり、その方々がプロモーターになり、各地でもいろんな面白い活動が出てくると思います。

天神や博多のようになりたいなともありますが、街の成り立ちも住んでいる人も違いますので、大橋の特徴と魅力を活かしたまちづくりが必要だと思います。

私はこの大橋エリアをどうやって、どう活性化していけるのか、楽しみながら活動しています。

南区役所 企画振興課  
企画係長 馬場 孝徳さん

福岡市では、若い人材が進学や就職で、東京などへ流失してしまうという大きな課題があります。

若い世代に福岡の良さを知ってもらい、地域にとどまってもらうために、各大学や地域住民の協力を得て“出前講座”、“公開講座”、“こども大学”などを開催しています。地域の方々に、南区には住みやすい環境や専門的な教育を受けられる大学がたくさんあるということを知ってもらうため、様々な活動を展開しています。



# 地域の特性や課題に応じて取組むまちプロ

## 中央区



福岡市科学館  
FUKUOKA CITY SCIENCE MUSEUM

## オール世代が楽しめる福岡市科学館

2017年10月、六本松に誕生した福岡市科学館。最新鋭のドームシアター(プラネタリウム)や科学を楽しく体験して学べる基本展示室など、話題のスポット科学館について子ども未来局子ども部青少年施設検討担当 池田忠浩さんに聞いてみよう。



福岡市科学館のことになると熱い話がとまらない

子ども未来局子ども部青少年施設検討担当 課長 池田 忠浩さん

### 福岡市科学館ってどんなところ?

福岡市科学館は、子どもから大人まであらゆる世代に対して、科学を通して、「福岡市民になって良かったね」と思われる施設を目指して設立しました。そのため、展示や体験プログラムは、子どもの学習だけでなく、大人のためのものもあり、初めての科学から専門的な科学まで、オール世代が学べるように工夫しています。

福岡は、クリエイティブ産業が盛んな街です。福岡市科学館は地元のクリエイターと協力し、産業の種をまき、その種をしっかりと醸成していく未来創造型の施設です。子ども達が、科学者やクリエイターに直接会って話し、自分もそのような科学者やクリエイターになりたいと思える、そんな交流拠点が科学館にあります。

さらに福岡市科学館は、移動式プラネタリウムと天体望遠鏡を積んだ“天文車”と、科学の実験機材を積んだ“科学館車”を持っています。科学館まで来られない病院の子ども達や遠方の人などに、しっかりと体験できる仕組み作りも行っています。

### 福岡市全体も科学館のキャンパス!?

キャンパスというのは、福岡市全体を科学館のキャンパスとして捉え、たくさんの方々と一緒にフィールド活動を行います。例えば、福岡市動植物園と協力して、天体望遠鏡で福岡市の夜を眺めるイベントを夜の動物園で開催したり、昨年7月には福岡市美術館と協力して、アートとサイエンスのイベントを東市民センターで開催したり、11月には福岡市博物館の特別展で星にまつわるトークイベントや星空解説を行うなど、福岡市すべてを科学館のキャンパスとして、一緒に出掛け、サイエンスという絵具で多彩な絵を生活の中に描けたらと思っています。

### 福岡市科学館はいつ来ても楽しい??

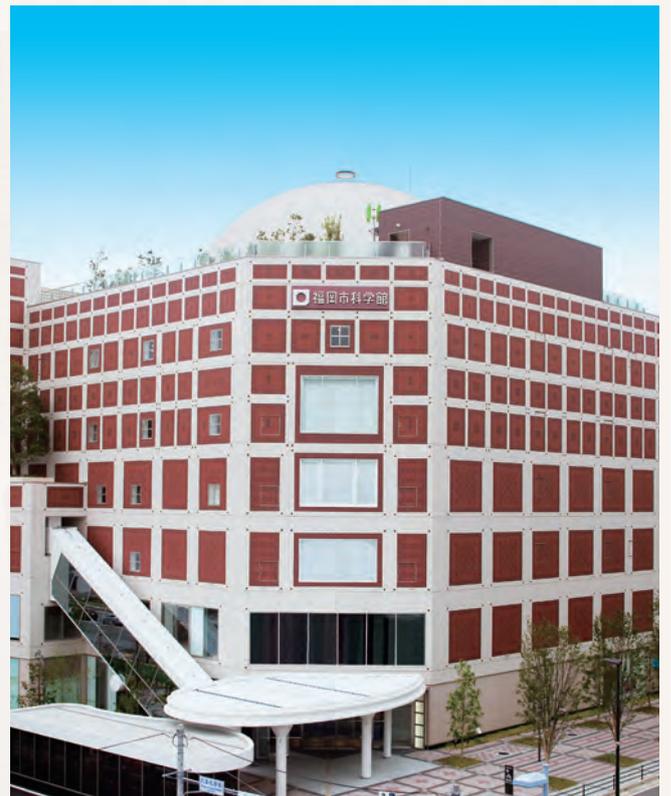
一般的に、科学館は一度体験するとなかなか再度来てもらえない。もう一度来てもらうために、新たな展示や体験プログラムをどのように展開していくかが課題です。そこで福岡市科学館では、大型企画展を年に2回、中型企画展を年に2回以上開催したり、基本展示室では2年に1度は小規模の展示更新、5年に1度は中規模の展示更新を行います。また、毎日実施するサイエンスショーやワークショップなどの体験プログラムの実施回数・種類は、日本一といつて

も過言ではありません。例えば、サイエンスショーは1日に3種類以上のプログラムを平日は2回以上、土日は6回以上実施し、半年に1度は新しいプログラムを開発していきます。

福岡市科学館は、非日常の体験が出来る場所ですが、逆に日常使いになってほしい。たくさんの方々足しげく通うことで、その人が科学館の魅力を発信していき、福岡市民が自分のまちの宝だと思えるようになる、そんな施設にしたいです。



6F ドームシアター(プラネタリウム)



外観

## 今後の活動が目白押し!

福岡市科学館の大きなイベントとしては、2018年3月24日～28日まで、世界約100カ国、およそ1万人の天文学者などで構成されている国際組織による、恒星、惑星、小惑星などの命名権を取り扱っている国際天文学連合（IAU）の国際会議“Communicating Astronomy with the Public 2018”を、日本で初めて開催します。

活動としては、次の世代を担う子どもたち向けに、科学に強い子どもを育成する、スーパーサイエンスジュニア養成講座というカリキュラムを開始します。クラブ活動を通して、科学オリンピック、さらには国際科学オリンピックで競える科学者のたまごを、ここ科学館から養成していこうと思っています。

## オール世代が楽しめる科学館の魅力

見どころのひとつに、世界最高水準8K相当のデジタル式投映機と自然に限りなく近い星空を再現する光学式投映機等を導入した最新鋭のドームシアター（＝プラネタリウム）があります。週末の夜など（月2回程度）には、星空を

バックにしたコンサートなど、大人向けのスペシャルイベントを開催するようにしています。

そのドームシアターの隣がサイエンスホール、ボタン1つで出し入れが可能な移動式観覧席により平土間利用も可能な多目的ホールで4KのVRシステムも導入しています。福岡市内では少ない300席のホールとして、主催事業が無い日は貸館として一般に貸し出しも行っていきます。

基本展示室では、「宇宙」、「環境」、「生活」、「生命」と未来について考える「フューチャー」からなる参加体験型の展示や、様々なショーが繰り広げられるサイエンスショーを楽しめます。

そして何より若田光一宇宙飛行士が名誉館長に就任いただいております。開館記念イベントとして、本人による講演会も実施し、「国際宇宙ステーションからその先のフロンティアへ」というテーマでJAXAの現役の宇宙飛行士ならではの話を熱く語っていただきました。今後も関連するイベントを開催していきたいと考えております。

他にも科学館の見どころがたくさんあり、語りつくせません!一度と言わず、何度でも福岡市科学館にお越しください。



- ① 5F 工作室
- ② 4F おやこひろば
- ③ 5F 基本展示室 生命全景
- ④ 6F ドームシアター(プラネタリウム)
- ⑤ 5F 基本展示室 ゼロトレーナー
- ⑥ 5F 基本展示室 サイエンステーブル



# 地域の特性や課題に応じて取組むまちプロ

## 博多区

### 新しく生まれ変わる 福岡空港

福岡空港は、国内線の乗降客数が全国4位、同じく離発着回数が3位（2016年度調査）となり、福岡空港を利用する人が年々増えています。人やモノが行き交うアジアの交通の要所としてさらに発展するため、国による将来的な滑走路の増設および平行誘導路二重化計画を受け、2015年、福岡空港ビルディングは国内線ターミナルビル再整備事業に着手しました。国内線ターミナルの新しい商業施設の包括的な名称を「greenblue FUKUOKA AIRPORT」と名づけ、飛行機を利用しない人も集まる場所として生まれ変わろうとしています。2017年1月、福岡の老舗の味から、ここでしか味わえない新たなメニューまで一堂に集まる“the Foodtimes”が、国内線ターミナルビル2階にオープンしました。2019年春には、地下鉄改札口と直結した吹き抜けのアクセスホールが完成する予定です。ホールの両サイドにはお店が並ぶ計画も進んでいます。

福岡空港の特徴は、第一に、そのアクセスの良さです。福岡空港は、都心から約7kmという近い距離にあるだけでなく、福岡市営地下鉄が国内線ターミナルビルに乗り入れており、JR博多駅から約5分、地下鉄天神駅からも約11分と、非常に利便性の高い空港となっています。ここまでアクセスの良い空港は、国内ではほかに例がありません。

2020年、国内線ターミナルビルの再整備工事が完了すると、より多くの人々が行き交う賑わいの場所となり、福岡の新しい顔となるでしょう。そんな新たなトレンドスポットとして注目を集める場所になるのを楽しみにしています。



福岡空港ビルディング株式会社  
常務取締役 副島 広巳さん

## 続々リニューアル

- 2018年 新「出発保安検査場／南」供用開始  
新「到着口／南」供用開始  
「到着コンコース／南」供用開始
- 2019年 「地下鉄アクセスホール」供用開始  
和菓子スイーツの殿堂  
「SWEETS HALL」オープン
- 2020年 新「バスラウンジ」供用開始



福岡空港再整備イメージ



アクセスホールのイメージ



ラーメン滑走路のイメージ



スイーツホールイメージ

## 博多区

### さざんぴあ博多



さざんぴあ博多は、複合施設になっていて、地域交流センター、博多南図書館、デイサービスセンターの3つから成ります。

さざんぴあ博多では、各団体さんが利用したいときに、会議室、多目的ホール、体育館をお貸ししています。また、昨年から主催事業として新しく教室を始めており、介護予防や2~3歳向けの運動教室などを始め、夏には無料映画を開催。2~3カ月に1回のサイクルで実施をしています。地域の方々がこの施設を利用し、地域の交流の場になることを目指しています。



さざんぴあ博多  
館長 大久保 正興さん(右)と受付スタッフ(左)

体育館

## 城南区

### 上長尾テラス



有限会社 吉浦ビル

代表取締役 吉浦隆紀さん

私が「上長尾テラス」を始めたきっかけは、福岡市とNPO法人ドネルモとの共働事業で行われた「地域デザインの学校」において、2015年9月に、自分たちが暮らす西長尾校区が選ばれ、その受講生として参加したことからでした。地域デザインの学校に参加した事で、自分たちの住む地域の現状を具体的に知る事ができ、既に地域活動をしている方の話を聞いたことで、少子高齢化の進んだ西長尾校区で求められている課題が、「若い人がもっと集まり、活動していく「拠点」を作る事」だと感じました。その後、それを実現するために、たくさんの地域の方に協力して頂きながら、地域交流スペース「上長尾テラス」を作る事ができました。

上長尾テラスがある城南区樋井川は、福岡市の人口増加とともに住宅街となったエリアで、近くには、身の回りの物は何でも揃う商店街(上長尾名店街)があります。少子高齢化が進むこの地域では、公民館だけではカバーできない人との繋がりを、上長尾テラスのような民間の施設を加えることにより、地域コミュニティを促すことが出来たらと考えています。現在、上長尾テラスでは、商店街の買い物帰りに立ち寄る高齢者や、おむつ替えをする主婦、学校帰りに宿題をする小学生など幅広い年齢層の人から利用さ

## 早良区

### 福岡市民防災センター

#### 九州で一番大きな体験型の防災センター

福岡市民防災センターは、普段忘れがちな災害の恐ろしさを疑似体験し、再認識してもらう九州で一番大きな施設です。また市民の皆さまに防災の意識を高めてもらうために火災、風水害、地震、救急、事前の災害対策、災害が起きた時の対処法などに関する出前講座も行っています。市民一人ひとりが災害発生時に的確な行動ができ、自助・共助意識のさらなる向上を目指し、災害に強い地域づくりを推進しています。

インターネットが普及した現在では、防災について公的な機関も様々な情報を発信し、パソコンやスマートフォンで気軽に検索して知ることができます。思い立った時には、防災について調べてほしいですね。そこで疑問に思われたときは、この福岡市民防災センターを利用して、体験していただき、職員に気軽に質問してください。



福岡市消防局  
防災センター事業推進課管理係  
消防士長 深堀 渉さん



上長尾テラス

れています。またレンタルスペースとして、2階部分の有料貸出や、キッチンも含め店舗まるごとの有料貸出もしており、最近では、商売を始めてみたい方や、自分の活動を広げたい方のチャレンジショップの場所になり始めています。この場所を通して、地域に暮らす人が、今までやってみなかった事にチャレンジでき、それが積み重なる事によって、今後、地域でも問題となる空き家、空き店舗を活用したお店や事業を増やし、さらに移住したくなるような、他の地域とは一味違う「魅力的なエリア」にしていけたらと思っています。





# 地域の特性や課題に応じて取組むまちプロ

早良区

## 福岡市博物館

1989年、早良区百道浜から中央区地行に亘るエリアに、アジア太平洋博覧会が開催されました。

その開催会場の一部に建てられた福岡市博物館は、改装後、1990年に開館。

### Q. 博物館の役割とは?

福岡市博物館は歴史民俗博物館。その役割は、「自分たちがくらす地域は、どのような特徴があるのか」を明らかにするために、文化財を収集・研究し、展示することです。先人から受け継いだ文化財を、現在の市民のふるさとへの想いや誇り、つまり、“シビックプライド”に結びつけて行くというのが、博物館の主な存在意義です。

### Q. 福岡ってどんな場所?

福岡は、大陸文化の玄関口です。日本列島で最初に本格的な水田稲作が始まった地と考えられています。大陸から伝わった青銅器、鉄器を自分たちで生産する食糧・農業最先進地、古代のハイテク最前線だったのです。金印や史跡「鴻臚館跡」は、ここが外交の最前線であったことの証拠です。さらに、「元寇防塁」からも分かるように国防最前線でもありました。

福岡は、このように歴史ある土地ですが、ほとんどの人が実感していないのではないのでしょうか？目に見える歴史的建物が点在する京都に比べ、福岡は実感するものがあまり感じられない。福岡は、2000年以上、ずっと重要な「拠点」であり続けています。ただ、時代ごとの日本全体の社会のあり方をうけて、その拠点の「機能」が変わる。そんな福岡の歴史的な特色を、わたしは「上書き都市」と呼んでいます。

一時期、福岡は支店経済と言われていました。文脈によっては否定的な意味を帯びることもありますが、本店があると重たく縛られてします。逆に本店がないのは、身軽で、新しいものにぱっと飛びつきやすい。それが福岡の街のひとつの気風を作っているのではないのでしょうか。そうしたひとつに福岡の人が祭り好きにつながっているのだと思います。

でも、福岡は、過去を温存もしないけど、否定しているわけではない。博多の中心街は「遺跡の宝庫」でもあります。発掘作業をすると何千年もの歴史が、層状に現れてくる。中世最大の貿易都市だったという証拠が、そこに凍結保存されているんですよ。 「上書き」の下から、過去のデータが復元されてくる、そんな都市です。



福岡市博物館 館長 有馬 学さん

### Q. 福岡市博物館の取組みとは?

福岡市博物館の組織には、学芸課、管理課、市史編さん室の3つがあります。

この博物館の収蔵品の多くは、地域のなかで受け継がれてきたものです。それらは、さまざまなきっかけで、市民から寄贈・寄託され、博物館にもたらされましたが、これら収蔵された文化財をお披露目するのが新収蔵品「福岡の歴史とくらし」です。これは開館以前から毎年必ず開催しており、同時に、寄贈・寄託された方に感謝状を贈っています。この新収蔵品展と感謝状贈呈式が、私たちにとって最も重要な行事です。こうしたコミュニケーションをとることで、寄贈・寄託をしてくださった方々から、継続的に、文化財や福岡の歴史や文化に関する多彩な情報が博物館にもたらされます。博物館の収集活動、「これでもう十分」を迎えることはありません。ずっと続けていくことが本質です。

博物館のなかに、市史編さん室という組織があるのは珍しい事で、出前講座や地域の歴史を特集する広報誌「市史だより」の発行など独自の活動をしています。南区日佐で出前講座を開催した時は、市史編さん室のスタッフが日佐の歴史について話した後、参加者の皆さんに、その場所について知っている伝説や体験談など自由に話をいただきました。その参加型出前講座が、自分の住んでいる地域を改めて見直すだけでなく、世代間交流のツールになり、非常に面白い講座になりました。

いま、管理課が力を注いでいるのは、こうした蓄積を、地域のにぎわいづくりにつなげ、博物館を楽しい「コト」に満ちた場所にすることです。福岡ならではの歴史や文化を発信するために、文化財を守り伝え、活用し、また、情報を体系化して市史のような刊行物にしていく。それを資源として地域に新しい活力を生み出していく。私たちはそんな地域に根差した博物館であり続けたいと思います。



年2回発行『市史だより Fukuoka』

## 西区

### 西部3Rステーション

環境について学ぶ場を提供し、ライフスタイルの変化につながる環境に優しい行動のきっかけ作りをする西部3Rステーション

西部3Rステーションが設立された当時（1994年）は、福岡市ではごみが増えており、日本でも前年に“環境の日”が制定され環境への意識が高まる中、西部3Rステーションでは、市民の皆さんにごみ減量を目指し、環境への意識を高めてもらうための事業を始めました。

私たち職員が行う主な役割は、不用なものを使ったモノづくり体験などのイベント開催や地域において3R実践活動をするための人材育成、さらに小学校、留守家庭子ども会、公民館に出前事業をしています。“西区地域環境サポーター養成講座”という参加体験形式で行う人材養成講座を西区役所では10年以上開催されています。その講座を受けた後、仲間ができて、ボランティア団体を作る方がいます。西部3Rステーションが、小学校へ出前講座をするときなどの職員だけでは人手が足りないときは、ボランティアの方が手

伝ってくださいます。また、ボランティア団体や個人で活動している方が、環境活動をするときは、この施設の部屋をお貸ししています。より多くの方に再利用の面白さを知ってほしいですね。



公益財団法人 ふくおか環境財団  
総務部環境啓発課 課長 尾形 英俊さん



1階には蛍光管や白色トレーの回収ボックスも設置



館内には、貸出図書やリサイクルブックも併設



西区まるごと博物館  
推進会

## 西区まるごと博物館推進会

地域と行政が一体となり、西区の魅力を発見し、伝える

西区まるごと博物館推進会とは、西区役所と一体となり、西区の自然や街並み、文化、歴史など魅力あふれる西区を保存し伝えるために立ち上げた団体です。西区まるごと博物館推進会は、2005年から活動を始め、66名（2017年11月時点）のメンバーになりました。

西区まるごと博物館推進会では、歴史、文化、自然、企画・広報部会と4つに分かれ、幅広い人に西区の魅力を知ってもらう

ために活動をしています。さいとびあで開催したイベントでは、1万人も集まるほど反響があり、やりがいを感じました。過去には、東京の墨田区より議員団のみなさんが視察に来られるなど、徐々にこの活動が知られていることが嬉しかったですね。自分の故郷ですから、九州はもちろん、多くの方にこのエリアの魅力を知ってほしいと思います。今後も西区の街の魅力を発信し続け、全国に広げていきたいと思っています。



6月17日 知ってとくする西区歴史講座



4月22日 大樹入門講座&見学会



5月21日 蒙古山・妙見山登山と北崎史跡巡り



9月24日 西区まるごと博物館 in さいとびあ2017



何より歴史が好きで、  
自分が好きですることが  
大切です。

西区まるごと博物館推進会  
会長 川岡 保さん



# 地域の特性や課題に応じて取組むまちプロ

## 東区

### 箱崎まちづくり委員会



箱崎まちづくり委員会  
会長 箱崎 次雄さん

箱崎エリアは、九州大学の移転やJR箱崎駅の移転高架化による区画整理で、徐々にまちの様子が変わってきました。

このような変化に対応するなか、まちづくり委員会は、九州大学の跡地利用や箱崎の歴史や伝統を守るために、地域に住む人と行政によるワークショップを開催しながらまちづくり計画を策定し、このエリアのまちづくりに関する活動をしてきました。その後、2004年に箱崎校区自治協議会が設立され、私たちまちづくり委員会は、主としてコミュニティづくりと九大跡地の利活用を核とした活動を始めました。コミュニティづくりとしては、年末には、クリスマスイルミネーションの飾りつけ、イブイブ祭、オータムコンサート、ウォークラリー大会など、様々な年齢層に参加いただけるイベントを企画しています。また他とは違ったコミュニティづくりの取組みに、この地域の一体感を出しながら、誇りに思ってもらうために箱崎音頭を制作しました。この音頭は、作詞作曲を募集し、人形飾り、ちゃんぽん、放生会など地元根付いた歴史や伝統行事などが歌詞に織り交ぜられ、箱崎の人たちだけで作りました。また菅崎宮をシンボルとした箱崎校区のロゴマークを作り、箱崎自治協だよりなどに掲載しています。さらに九州大学の跡地利活用については、箱崎校区だけでなく、東箱崎、菅松、松島校区など周りにある校区と一体となり活動し、跡地利活用の議論を進めています。そして、自分たちが住んでいて楽しいまちづくりをしながら、多くの人に魅力を伝えていく活動をしていきたいと思っています。



福岡市箱崎公民館  
主事 玉利 麻由美さん

このエリアは、マンションが建ち、交通が便利なため、ニューファミリー層や外国人居住者が増えています。さら

に、2世帯、3世帯住宅で昔から住んでいる人が多いのも箱崎地域の特徴です。このような特徴ある地域で公民館事業を展開する時は、幅広い人に参加してもらう工夫が必要です。箱崎校区の子ども、子育て世代や高齢者、障がい者、外国人などに興味をもって貰える内容を心がけています。また、まちづくり委員会で作った歴史散策まち歩きのための“そうつくマップ”をもとに“はこぞきおやくだちマップ”を作り、外国人向けとして、英語、中国語、韓国語版も作成しました。

私は結婚を機に箱崎に移り住んで来ましたが、箱崎の人は、外から来た人も快く受け入れてくれる懐の深さがあります。それは、多くの人たちが築き上げてくれたものがあつたからこそだと思います。そして私自身が子育てするようになり、地域の方々子ども達に気軽に声をかけてくれる『子育て世代に優しいまち』だと改めて気付きました。多種多様な人が交流する活気ある地域で、微力ながら、もっと心豊かに住めるようなまちになるお手伝いをしていきたいと思っています。



箱崎まちづくり委員会のメンバー

## 東区

### 志賀島推進協議会



志賀島では、農漁業や観光振興につなげるために、2002年に「志賀島振興協議会」を結成し、2016年「志賀島活性化構想2015」を策定。構想の将来像『みんながつながり支えあう、元気!志賀島』の実現に向け、2016年に地元の若い人たちを中心とした「志賀島よかとこ隊」を立ち上げ活動を始めました。志賀島の自然と歴史資源を活かした島づくりに取り組んでいる活動は、“金印まつり”、“あまおう祭り”、“産直市”などのイベントを活用し志賀島の魅力を発信したり、空き家・空き地を利用することで、観光客が志賀島に来られたときの“おもてなしの場”づくりなど、年間を通して、様々な活動を展開しています。道路や公園などの整備、土地利用の規制緩和など、行政と一体になった志賀島づくりをしています。2017年10月、金印公園の一部リニューアルオープン。2018年3月には、全面オープンを記念してイベントを開催する予定です。



こども灯明



志賀島振興協議会  
会長 中西 敏明さん

昔のように島に賑わいを取りもどしたい



子育てしやすい島を目指しています!

「志賀島よかとこ隊」を立ち上げた  
松本 泰江さん

## ■ 研究所情報

公益財団法人福岡アジア都市研究所は、各界各層の協力と連携のもとに、都市政策を研究し、アジアの視点も取り入れながら、将来の都市戦略を提言する研究機関です。また、様々なネットワークを構築し、情報の交流・発信を行いながら、各セクターを結びつけるコーディネーターの役割も担っています。「福岡・アジアのことなら都市研に」と誰からも期待される研究所であることを、私たちは願うのであります。みなさま方の温かいご支援、ご協力を心からお願い申し上げます。

使命－公益財団法人 福岡アジア都市研究所は…

「市民とともに福岡を究め、地域に役立つ研究所を目指します!!」

「アジアの都市と連携し、グローバルな視点でローカルを考える研究所を目指します!!」

## ■ 賛助会員制度

年会費（法人一口：10,000円、個人一口：5,000円、学生一口：2,000円）をお支払いいただくと、さまざまな特典が受けられる賛助会員制度があります。詳しくは、(公財)福岡アジア都市研究所までお訊ねください。

TEL:092-733-5686 FAX:092-733-5680 E-mail: info@urc.or.jp

### ● 特典

1. 研究所主催のセミナー等の開催情報をお知らせします。
2. 都市情報誌fu+を毎月1部無料でお届けします。
3. 研究紀要を毎月1部無料でお届けします。
4. URC資料室だよりを毎月、eメールまたは郵送によりお届けします。

## ■ 都市政策資料室

(公財)福岡アジア都市研究所の都市政策資料室では、アジア地域を含む都市政策関係図書、各種調査・研究の成果報告書、行政資料などを幅広く収集・公開しております。どなたでもご利用いただけます。

皆様のご利用をお待ちしております。

開室：月～金10:00～17:00

(土曜日・日曜日・祝日・年末年始・毎月最終業務日・資料整理期間(不定期)は休み)

蔵書検索：研究所のホームページから資料室の図書・資料が検索できます。

福岡アジア都市研究所 情報誌 fu+(エフ・ユー プラス)第18号

2018年3月発行

### ■ 発行所

公益財団法人福岡アジア都市研究所

〒810-0001 福岡市中央区天神1-10-1

福岡市役所北別館6F

TEL:092-733-5686 FAX:092-733-5680

E-mail: info@urc.or.jp

■ 編集責任者：鹿毛 尚美

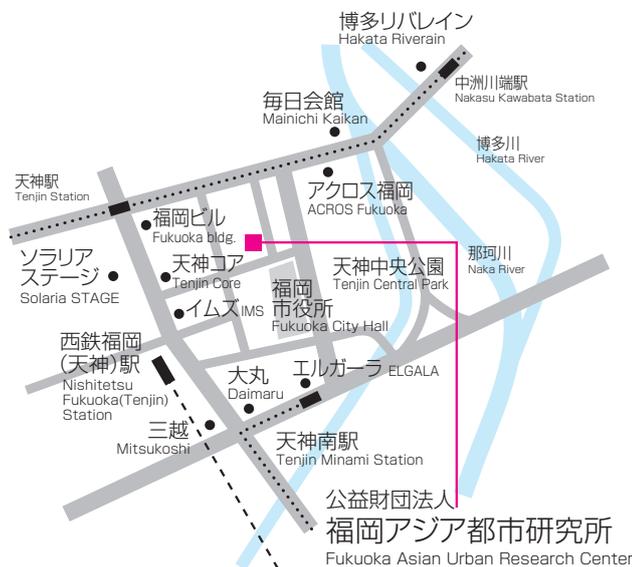
■ 編集スタッフ：中島 賢一、足立 麻理子

■ デザイン・印刷：アオヤギ株式会社

■ 表紙・表紙裏写真提供：福岡市 撮影 Fumio Hashimoto



URL: <http://www.urc.or.jp>



公益財団法人  
福岡アジア都市研究所



# fukuoka

Fukuoka Asian  
Urban  
Research  
Center

NO. 18

